

1 ふれあい

1 ねらい

身の回りの人や自然・社会とのかかわりを通して、自分自身を見つめ、人間としてよりよく生きようとする子どもを育てる。

2 「人間」領域・「環境」領域から、「ふれあいタイム」へ

本校では、研究テーマを「自立に向かう子どもたち」と設定し、テーマ実現のために、社会の情勢や子どもたちの実態を踏まえ、カリキュラムの見直しを行った。その結果、教科や領域の中に収まらない内容が必要であるという認識のもと、総合的な学習を設定した。この総合的な学習の中に「人間」「環境」の領域があった。

「人間」領域の設定主旨は、次の通りである。本校の校区は広く、登下校に時間がかかるため、放課後や地域に帰ってから友だちと一緒に遊んだり、ともに活動したりする機会が作りにくい。その上、テレビゲーム等の普及により、外で遊ぶ機会も減ってきている。その中で、子どもたちは、休憩や放課後の時間にでも、友だちと誘い合っ一緒に遊ぼうとしている。これは、友だちとふれあいたい、かかわりたいという気持ちの表れである。

このような実態から、身近な人とかかわりの中で学ぶことができる学習を設定したが、「人間」領域である。このかかわりあいの中で、自分自身をふりかえり、自他のよさに気づき認め合うことで、さらに、自分のよさを伸ばしていくようになるだろう。そうすれば、共に生きているという実感や成長の喜びを味わうことができるだろう。

「環境」領域の設定主旨は、次の通りである。本校の子どもたちは、街中で生活している子がほとんどであり、自然とふれあう機会が少ない。しかし、子どもたちは、遠足や宿泊などの行事、学習の場において、山や川、虫や動物などの様々な自然環境に対して、強い関心を示している。「なぜ?」「何?」「知りたいな」という思いを感じる人が多い。

そこで、自然の中での丸ごと体験から生まれた、その子ならではの問いを大切に、解決していく学習を設定した。この学習を積み上げることにより、自分が自然の一員であるということを実感し、自然から恵みを得ているという感覚がもつことができる。そして、自然を愛し、守っていこうとする態度が身に付いていくのではないかと考えた。

このような主旨により、「人間」「環境」の領域を設定して実践を積み重ねてきた。その結果、明らかになったのは、両者とも、多様な人々や様々な自然とかかわりの中で、自分自身と向き合い、「自分はどう生きていくべきか」について、それぞれの立場から考えていく学習だということである。そこで、子どもたちが、自分の存在を見直し、大切に、将来を見通しながら生きていく力を身に付けることができるように「ふれあいタイム」として統合した。

3 「ふれあいタイム」の基本的な考え

「ふれあいタイム」の学習を通して育てていきたいのは、人間として周囲と共によりよく生きていく力である。先述したように、多様な場や自分の実態に応じて、「自分はどう生きていくべきか」考えることのできる子どもを育みたい。その力は、「ふれあいタイム」の学びの基本である課題解決的な学習の積み重ねを通して、確かに対象と向きあうことで獲得できると考えている。

本校では、「人間」「環境」領域を統合することで、よりゆとりのある課題解決的な学習

の場を設定していきたいと考えた。それぞれの学年の子どもたちの実態に応じた、柔軟な単元設定を可能にし、より豊かで多様な「直接体験」の場を保障するようにしたいと考えたのである。その際、「直接体験」がそれだけで終わらないように、課題として焦点化していくよう支援を行うようにする。また、1つの単元で学んだことが、次の学習の課題として整理できるよう支援していく。そうすれば、子どもたちは活動の内容に留まらず、自分と向きあうこと、自分を見つめること、自他のよさに気づくこと、そのよさを認めあうことができるようになるだろう。

こうした学習の積み重ねが、さらに一人ひとりの子どもたちの興味・関心に応じた多様なふれあいや課題を生み、それぞれの追究・ふりかえりを充実したものにし、多様な学習へとつながっていく。子どもたち一人ひとりが、自分の課題を確かに見つけ、よりじっくりと学習に取りくむことができるようになるだろう。

このように、子どもたちの学習の質を高めることで、「人間」「環境」領域を発展的に統合していくことを目指している。

4 「ふれあいタイム」で大切にしたいこと

「ふれあいタイム」の基本的な考え方を軸としてねらいを達成するために、課題解決的な学習を行う上で大切にしたいのは、子どもたちが自分自身の自立や成長を確かに感じとり、体験や活動を次の課題へと焦点化していくことができるような学習を設定することである。そのためには次のような支援を大切にしたい。

- 対象と直接かかわり向かいあう体験を通して、自分なりの活動や思い、課題を生むことができるような支援。
- 身の回りの人やものとかかわりながら、没頭して追究することができるような、個に応じた支援。
- 自分が大きくなった、成長した、力がついたという実感を持ち、さらにこうしていきたい、考えたい、広げたい、深めたいという願いや思いをもつことができるような支援。

具体的には、人と人のかかわりが生まれる場としての、「遊び」の要素を取り入れた活動や、より多くの友だちや幅広い人々とかかわることができる場としての、学年・学級を超えた行事やたてわり活動、宿泊学習などを重視している。

また、身近な自然とのかかわりが生まれる場として、「水」をテーマとした太田川の探検を中心に、各学年の子どもたちに応じた活動を、宿泊学習にも絡めて設定している。

いろいろな人の生き方や生き様にふれたり、自然のよさを感じたりする活動の中で、子どもたちが自分を出しあい、周囲とぶつかりあい、認めあう場が生まれること、関係を探っていくことができるようにしたい。

5 各学年ごとのねらいと活動事例

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
ねらい	身近な人や自然・社会の中で互いのよさに気づき、自分の思いや考えを表現しようとする。	学校や地域など、身近な集団や自然・社会の中で、互いのよさに気づき、自分らしさを発揮しようとする。	多様な人や自然・社会とのかかわりの中で、互いのよさを認め、ともに伸びようとする。
単元名	学校たんけん えんこう川たんけん 元宇品たんけん	太田川探検隊Ⅰ・Ⅱ 四学級交流 1/2成人式	川は友だち ヒロシマ・ナガサキ
	色別活動（運動会） 縦割り活動		

ここに挙げた活動のほかにも、学年に応じて様々なかかわりが生まれる活動が考えられる。学年で新たな活動を考え実施したときには、活動例の中身として付け加えていく。また、複式学級については、人とのかかわりに関する活動として、たんぼぼ集会や帝釈小との交流が行われている。そのため、単式学級のカリキュラムとは、時間数を調整した上で実施していくこととする。

6 成果と課題

「ふれあい」領域は、今年度、子ども達に、より豊かな実体験を基に、ゆとりある追究・ふり返り活動を保障したいという意図により、「人間」・「環境」の2領域を統合した。つまり、「ふれあい」領域としてスタートして1年間しかたっていない。そこで、成果と課題については、領域の内容が、「人間」・「環境」の旧領域のものを踏襲しているので、その内容についての振り返りを中心に行う。

【成果】

○「1／2成人式」

- ・ 毎年、4年生で「1／2成人式」を行っているが、学習の雰囲気や流れが型にはまらず、各担任の学級経営に対する姿勢が色濃く出ている。そのため、日々の生活から遊離せず、しっかりと自分を見つめ、将来の自分について考えを深めることができている。

○「太田川探検隊」

- ・ 子ども達が幅広い活動を行うようになった。これは、この学習が、学校内で定着してきたことと、低学年の生活科の学習としっかりと結びついてきたからだと考える。
- ・ 2年間、同じ場所へ行くのは、活動の見通しや追究活動の幅を広げるのに効果的である。
- ・ 活動時間が柔軟に使えるようになり、子ども達を焦らせる言葉を使わなくてよくなったので、教師の方もじっくり取り組めるようになり、支援もしっかり与えられるようになった。

【課題】

- ・ 観念的でなく、生の人間同士の心の絆を結ぶという点が弱かった。
- ・ 「まるごと太田川」では、子どもの幅広い要望に応えられなかった。
- ・ 宿泊学習との関連もあるが、設定の時期が難しい。
- ・ 資料集めが、本やインターネットに限られていた。もっと自分の足を使って、聞き取り調査をさせる必要がある。
- ・ 子どもの活動が行き詰まった時、教師が全面的に支援するのではなく、問題解決のための支援ファイル（そのファイルを見れば、解決方法などが分かる）や人材バンクを用意する必要がある。総合的な学習が、完全実施されていることもあり、各公共機関に子ども向けの内容のしっかりした資料の作成を要望する必要がある。
- ・ 子どもが作成したものを保存し、次の活動へと生かすことができるようなポートフォリオ的なものが必要である。

【改善の視点】

- ・ 新学習指導要領では、「個の伸長」に重点が置かれ、いろいろな施策が実施されている。しかし、子どもは社会の一員として生きていく存在であるので、周りの人たちと心の絆を結ぶ意欲と技能を身に付けなければならない。心は、幾層からもできている。そのため、子ども達には、その各層（意識世界・前意識世界・無意識世界）に対応した取り組みが必要である。特別活動・宿泊学習・総合的な学習が有機的に機能するようなカリキュラムにする必要がある。